

第8回生涯学習センター運営協議会

〔日 時〕 2012年11月27日（火） 18:00～20:00

〔場 所〕 生涯学習センター 視聴覚室

〔出席者〕 ※敬称略

委 員：石川 清（会長）、小川 久江（副会長）、岩本 陽児、押村 宙枝、川島 演、黒田 純子、
佐合 昭浩、菅谷 万里子、竹葉 かほる、辰巳 厚子、並木 修、西原 要四郎、
柳沼 恵一
以上 13名

事務局：熊田センター長、小林課長補佐、外川統括係長、丸山主事（記録）

〔欠席者〕 富川 尚子、中村 香

〔傍聴人〕 1人

〔資 料〕 ・ 第7回生涯学習センター運営協議会レジュメ

- ・ 2012年度生涯学習センター事業企画書兼事業評価シート資料1～18
- ・ 2012年度生涯学習センター事業企画書兼事業評価シート報告1～4
- ・ センター長報告
- ・ 平成24年度 東京都公民館連絡協議会委員部会 第2回研修会記録
- ・ 平成24年度都公連・委員部会研修
- ・ 生涯学習NAVI 好き！学び！ 2012年12・1月号
- ・ 2011年度まちだの公民館

<協議事項>

1. 2012年度生涯学習センター事業の企画について

（1）資料1 市民企画講座「心とからだを元気にするコミュニケーション講座」について説明。

（意見・質問）

委 員：市民大学HATSの講座「こころ」と「からだ」の健康学はストレスにどう対応するのか、心と体をテーマにした座学中心の勉強であるが、それと内容的に似ている感じがある。どう違うのか。

事務局：市民大学講座は法政大学スポーツ健康部の高見先生を中心に講座を組み、座学中心である。市民企画講座は市民目線で企画をしている。市民企画講座の主旨は、市民団体が自分たちで講座を行うことができるように、講座をすることによってそのノウハウを培っている。その後、独自に講座を組めるようなサポートをするという考え方でやっている。そういった視点で採用した。

会 長：問題点は2つあり、似たような内容であることに対しては、視覚と聴覚を使うことで感覚的に違うことがあるということ、そもそも同じような企画があったときにどうすべきなのかということである。

委 員：「こころ」と「からだ」の健康学を市民大学で座学中心に様々なことをしている。よく似た感じになっているので、その整理・統合が必要ではないかと思った。

会 長：全く同じでは意味がないが、少し違っていれば市民企画であるという観点からは、同じような内容になっても認めていくのかどうなのか。

事務局：今年度の事業については、市民大学との調整がきちんと取られていなかった部分があった。来年度の市民企画講座は的を絞りと、地域課題や社会問題等、こちらで指定した課題を募集していきたいと考えている。来年度以降は内容的にかぶらないように考える必要がある。市民サイドで見た企画と大学等の専門の方達が専門的に組んだプログラムという視点とに分けて考える必要があるかもしれない。今回はそれがなされていなかった。

（2）資料2 親子科学教室「-162℃の不思議な世界を体験しよう」について説明。

(意見・質問)

委員：以前にここで話題になったが、親子と限定した場合に寂しい思いをする子どもが市内に3分の1いる。その配慮を是非お願いしたいと思う。

会長：子どもが単独で申し込んできても受け入れるのか。ペアでなければいけないのか。

事務局：ケース的にはあまりない。親子ではないことはあった。例えば、子どもと親戚の方、子どもと近所の方など、そういう場合は認めていきたい。親子でなければいけないということはないようにしたい。

委員：よろしくお願ひしたい。伝統的な考え方をしていると、どうしても網の目からこぼれてしまう層が出てくる。それがどんどん増えてきているという認識がある。むしろ、こぼれてしまう層を手厚く、例えば、この地域の養護施設に呼びかけをするような、そういう社会的役割が公民館にあると思う。

委員：15組30名の募集であるが、子ども対大人が1対1ということか。親1人に子ども2人を連れてくる場合はどうなのか。

事務局：それも想定している。15組45人になることも想定してある。その場合を見越して募集を15組と少し落としている。余裕があれば少しプラスになる可能性もある。

委員：募集の表記のしかたによっては参加をあきらめることになるかもしれない。15組30名と書いてあったら、1人しか連れていけないと普通は思う。内容として、大人がついてないと困るのか。

事務局：目的には親子の絆ということが一つある。共通の話題で会話をするというのが狙いの一つにある。その辺は臨機応変に対応したい。募集の際にある程度の制限をしておかないとどこまでかが分からないので、大人対子どもが1対2や1対3になることを想定して、また実験する場所を広く取る必要もあるので、15組30名とさせていただいた。

委員：昨年も似たような企画があったのか。親子となると中学生の参加は難しいと思うが、データがあれば参考に教えていただきたい。

事務局：昨年は実施していない。

会長：一般論として、小中学生を対象にした親子教室に中学生はどのくらいの割合なのか。

事務局：統計はとっていないが圧倒的に小学生が多い。親子となると中学生は来にくいと思う。

委員：参加したくないような企画ではないと思うが、実態として参加しにくいと感じた。資料3のプラネタリウムは制限がないので良いと思う。

事務局：申込みがあれば、中学生だけでも参加OKという形になると思う。

委員：そういうことであれば、親子教室という言葉自体が時代遅れになっていると思う。お金がかかるので保護者が申込みをしなくてはいけないということでなければ、保護者と参加しなくてもいいと思う。事故があるとは思えない。意欲的にチャレンジしていただきたいと思う。

(3) 資料3 生涯学習センターに「プラネタリウム」がやってきた！について説明。

(意見・質問)

委員：宇宙に興味を持つという意味では、プラネタリウムも閉館してしまったのでそれに変わるものとして、星空に興味を持つという点ではいいと思う。対象が3歳以上だが、宇宙や星空に興味をもつのはもう少し上ではないか。3歳くらいの子どものと騒いでしまうと思うが、この対象にしたのは何か意味があるのか。

事務局：最初は下限がなかった。上の子どもが小学生で下の子どもも一緒に連れて来る場合もあるので3歳以上と明記した。3歳以下であるとプラネタリウムの中で静かに見られる状態ではなくなってしまう。また、プラネタリウム内に入れる人数も限られている。

委員：場所は生涯学習センターのホールを使うのか。

事務局：ホールで行う。夏の子どもフェアの中でもプラネタリウムを実施した。ホールの中に風船のようなドームを設置し、その中に入るしかけになっている。

委員：小学生が天体や科学に興味を持つという意味では非常に大事なことだと思う。是非成功させていきたいと思う。

委員：どのような理由で中学生までとしているのか。

事務局：青少年を対象にした事業なので、中学生までにした。

委員：プラネタリウムは中学生・高校生が多く入っている。高校生に呼びかけるのは無駄なことなのか。

事務局：無駄ということではない。プラネタリウムのキャパが決まっているので、ある程度制限させていただいた。夏休み子どもフェアのときは1,500人が来館し、予約なしで実施していたので人が殺到し、当初2回講演だったのを頼み込んで3回講演にしてもらったという経過がある。プラネタリウムだけではなく、天体の説明も実施している。そのレベルの問題もある。講師には小学生から中学生くらいのレベルでと頼んであるので、その辺を中心に考えていた。高校生を度外視しているわけではなく、あまりにも対象を広げてしまうとその辺の問題がある。

委員：枠は作らない方がいいと思って質問をした。プラネタリウムだけではなく、今、宇宙科学についてかなり多くの方が興味を持っているのではないかと思う。

委員：高校生を対象にした天文に対する講座があってもいいと思う。それはレベルが小中学生とは違ってやや専門的になるし、それを学んだ結果を小さい子へ伝える役割も担ってくると思うので、そういった目的を加味した講座を何か考えてもいいのではないかと思う。西東京市では「親子天体」という講座を実施し、高校生が運営スタッフとして参加してそういった仕組みを作っていると聞いた。東京都公民館連絡協議会の第2回委員部会研修会でそういった発表があった。町田でもそういったことができればいいと感じた。ご検討いただきたい。

委員：見たい方はたくさんいると思うので、人数を絞るために年代分けをして、今回は子ども、次は大人というようにしてもいいと思う。年代を分けるときに、義務教育ということで小中学生はひとかたまりにしやすいと思うが、1年生と6年生は別人種くらい違うので、分けるとしたら小学校6年生まで、中高生までとしたほうが良い。少し背伸びをして高校生と一緒に何かを学ぶことは、中学生にとってとても嬉しいことである。中高生対象の企画をしていたと、保護者の問題もクリアできるし、中学生は高校生と同じものを聞けるというときどき感があるし、小学生は小学生に絞った話し方をさせていただけると理解がいいし、保護者を一緒にするかの問題についても対応ができると思う。小中学生と反射的に括らない方がいいと思う。

事務局：ターゲットをある程度狭めないで、あまりに対象者を広げてしまうと、どこに焦点をあてて企画・運営していいのかがぼけると思う。今回は、高校生は対象としない、次回は高校生にも機会を与えるというように企画を付け加えていくほうがいいと思う。何か企画をするときに、ターゲットはある程度明確にする必要があると思う。

委員：今回はなぜ3回上演しないのか。生涯学習センターは非常にいい場所にあるが、同じ建物の5階までとは全く違い公民館には来ない人たちが来ている。提案としては、例えば、1番目の回は小学生が楽しめるレベルの話、2番目の回は中高生が楽しめるような水準の話、それから3番目の回は若い方が楽しめるロマンティックな話をメインにして、これを機会に公民館に足を運んでもらえるような場にしたらいいのではないかと思う。

事務局：夏休み子どもフェアはもともと2回講演だった。殺到してしまい、見られない方が多くいたので団体の方にはその場で頼み込んで3回目をやってもらった。今回は時間的な配分もあり2回にしている。プラネタリウムだけではなく、その前に講演もさせていただく。ご意見は参考にさせていただく。

委員：前回は1回目を小学生以下、2回目を中学生といった分け方はしなかったのか。

事務局：子どもフェア自体がそういう設定をしなかった。生涯学習センター全館を使って、各ブースに分かれて様々な催しを実施していた。

委員：今回は1回目を小学生まで、2回目を中学生以上といった分け方にするという考えはあるか。

事務局：今のところは、小中学生だけで予約がいっぱいになると予測される。何日かに分けて行えばいいが、ホールの予約の関係や他の事業もあるので、なかなかその辺は難しいと思う。

委員：プラネタリウムの人気が高いということであれば、例えばこういうことを検討されたらどうか。川崎市では生田緑地の中に新しい施設があり、プラネタリウムは世界最高水準のものを使っている。教育委員会と協定を結ぶなど、町田でお客さんを集めて川崎市の施設を使わせ

ていただくというような連携の仕方も将来的に工夫できるといいと思う。川崎市の青少年文化館に“川崎ぷりんちゃん”という建物が出来て、その中に地元の方が作った「メガスター」というすばらしい機械を持っている。

委員：規模は小さいが、玉川大学にもある。

(4) 資料4 サタデーライブ「お話と音楽～和の響き～新春ファミリーコンサート」について説明。
(意見・質問)

会長：NPO法人日本の音翠の会は前から実績があるのか。

事務局：昨年の11月にも実施した。100人以上の参加があったと報告を受けている。

(5) 資料5 町田ショートフィルムフェスティバルについて説明。
(意見・質問)

委員：とても楽しみにしている。「嫌われ者のラス」は海洋ゴミの物語で活動すればするほどみんなから嫌われてしまうという、そういう屈託のない作品である。是非市内の大学生が交流できる場にしていただければいいと思う。

事務局：この企画では大学生と制作者にも参加していただき、制作者とコミュニケーションができるように交流会も実施したいと思っている。フェスティバルの中で上映会と交流会をして、ショートフィルムという一つのジャンルを知っていただけるような取り組みができる企画にしたいと思う。

委員：高校生等の若い人を呼ぶという意味では、こういった企画を積極的にやるべきだと思う。NHKのeテレでは小学生から高校生くらいの若者がショートフィルムを作って投稿するといった番組がある。おそらく今の子どもはこういうものに興味があると思うので、ショートフィルムの作り方やコンテスト等をすれば若者を呼び込むことができると思う。

委員：これはすばらしい企画になると思う。かなり反響が大きく、来年も再来年もというようにどんどん拡大し、あまりPRしなくても大きなイベントになるのではないかと予感する企画だと思う。こういうものは是非積極的に、いろいろな意味でバックアップしてやるべきだと思う。

委員：ショートフィルムは何本見られるのか。

事務局：さがまちコンソーシアムに加盟している大学の中から6大学、6作品を前半と後半にわけて上映し、その間に「嫌われ者のラス」を入れる形にしたいと思っている。コンテストではないので、作品についてはさがまちコンソーシアムにお任せしている。ジャンルを問わず、いろいろなものを出していただければとお願いをしている。

委員：東日本大震災を契機に、映像で地域興しをするところがあちこちに見られる。こういうイベントが蓄積され、町田の一つの特色になっていくと魅力的だと思う。直接生涯学習センターに関わる話ではないが、例えば公共図書館と連携して、ここで上映したものをDVDに収録して図書館でみんなが視聴できるようにするといった社会教育施設間の連携も検討していただきたい。

3. 事業評価について

(1) 資料6～15 平和祈念展について説明。

(意見・質問)

委員：平和祈念展は8月6日のヒロシマの原爆の日に合わせて実施されたと思うが、夏休みということもあって応募者が少なかったのか。その辺の判断はどうしているのか。

事務局：8月15日の終戦記念日に合わせて平和祈念事業を実施している。そこに合わせるとなるとお盆の時期に入ってしまうので、それが原因ではないかと思う。

委員：紙芝居は広島原爆の日に合わせての感じであるが、8月4日、5日は夏休み初めであり、田舎へ行ったり、おばあちゃんの家へ連れて行ったりということもあるから人が集まりにくいという感じも受ける。

- 事務局：資料6については、親子で参加しやすい環境づくりをする工夫が必要であると考え。何か良い方法はあるかご意見を伺いたい。
- 委員：戦争体験をした世代が減っているという意味では、これこそ社会教育でやらなければいけないことだと思う。生涯学習センターが企画をし、小学校等へ出前して事業を実施することは出来ないのか。各学校でも様々な戦争教育をしていると思うが、生涯学習センターで実施して人が集まらないのはもったいないので、可能ならば企画を出前していくようなものがあってもいいと思う。
- 委員：子どもフェアではかなり集客できたと思う。平和祈念の展示等を一緒にできれば多くの人がふらっと見に来て、あつと思うことができると思う。わざわざ足を運ぶことはないにしても、来た方がたまたまそこへ行くというような設定もできるのではないかと思う。
- 委員：これこそ公民館がやるべき事業だと思う。参加者が予定よりも下回っているが、参加すれば感動や思いを感じると思う。やはりPRのしかたが大きな問題だと思う。4日から12日という2週間近い期間に様々なイベントがあるので、関心のある方が何か聞いてみたいと思ったときに自分の関心によりフィットするものを示してあげる、ガイドンスしてあげることが必要だと思う。例えば、感覚的に様々なことを学びたい人にはこの企画があります、家族で考えたい人にはこの企画があります、高齢者のみなさんで考えたいという場合にはこの企画があります、と対象をセグメントしそれぞれに合うコースが用意されていることが分かるような宣伝ができれば、自分の関心のあるところへ参加できると思う。
- 会長：実施結果を見ると青少年の観客者数を気にしているようだが、企画によっては青少年の観客数を問わないものもある。その効果指標を「%」で表していたり「人」で表したりしている。また、単位は「%」となっていながら、目標や結果では人数を入れているものもある。大事ならばしっかり書いていただきたい。人数で表すと全体の中でどれくらいかが参加・募集状況欄をいちいち見ないといけないので、「%」にしたほうがいいと思う。
- 委員：平和祈念展を生涯学習センターでやる意味はあると思うが、これを生涯学習センターから各小学校に出前するようなことは考えられないか。そうすれば場所がない、日にちが悪いといった問題は解消されるし、生涯学習センターの存在をPRできると思う。
- 事務局：紙芝居や被爆体験談はできると思うが、展示資料展は難しい。資料はここで持っている物ではなく、広島原爆記念館から借りている資料もある。
- 委員：どなたが借りているのか。
- 事務局：ここで借りている。それだけの人数の確保も必要となる。町田市民から集めた戦時資料も展示していた。戦時資料の活用については、教育委員会でも話が出ているので、今後資料の活用はされていくのではないかと思う。
- 委員：小中学校では平和祈念行事はどのように行われているのか。
- 委員：小学生では社会で戦争の話が出てくるのは3学期手前ぐらいである。8月4日は日光に行く時期になるので、子ども達はおそらく参加出来ないと思う。ただ、チラシ等で資料展の宣伝をすれば6年生あたりは出かけてくれると思う。以前いた他市の学校では、総合的な学習の時間に語りの方を呼んでお話していただいたこともある。こういう方がいるということを知っていただければ、総合的な学習の時間等で呼ぶことは可能だと思う。
- 副会長：町田市が非核平和都市だということを認識した中でこれを実施するわけであって、その辺を小中学生に伝えていけたらと思う。全部の企画は無理でも、紙芝居など学校に入れられる、ものは入れていくというのは可能なのか。可能であれば、今は興味のある方がきていると思うが興味のない人ほど知ってもらいたい。どうすれば興味のない人へも伝えていけるのかと考えたときに、学校は大きな力ではないかと思う。
- 委員：資料14について、法政大学の学生のDVDは市内の小中学校全てに配布されている。平和都市宣言の市町会で作ったB2大のポスターも全校に配られている。来年は30周年記念の年であり、それに合わせて各校で実情に応じて掲示をしたり、DVDを活用したりといったことが教育委員会から話が出てきている。それぞれの中学校で活用されるのではないかと思っている。
- 委員：DVDは為になるものだと感じた。学生が町田の体験者の話を聞き取るということで、非

常に親近感もあり良かった。

事務局：学校に出前に行くというのは難しいと思う。小学校だけでも42校、中学校も20校ある。順番に回ったとしても何年もかかってしまう。いかに生涯学習センターに来ていただくようにするか。興味のない方をここに引き入れていくのは難しいと思うので、その辺の工夫を考えたほうが現実的であると思う。8月は学校もお休みなので、学校にお願いして子どもを連れてきてもらうことは出来ない。その辺をどうしたらいいかが課題だと感じる。

委員：小学校では夏休みに入ったすぐの月曜日から金曜日までは夏休みプールという、先生主体のプールがある。その後に開放プールが始まる。これは基本的にどこの小学校でも同じである。水泳をする子は3日まで水泳して、4、5日は休み、そして開放プールという形になる。その他に林間学校があったり、サッカーや野球の合宿があったりといろいろ重なる。事業の日程をずらすのか、違う形にするのかということは非常に大事だと思うし、来年もまた同じように開催すると、まず小学生は来ないと思う。

委員：小学校全校ではないが、サマースクールというのがある。学校によっては教員がメインになったり、地域のボランティアがメインになったりしている。それは夏休みの何日間に子どもを集めて、普通の授業ではできないことをしている。サマースクールは学年の枠を外して、工作をしたり、昔の話を聞いたりする。そこにはおそらく入っていけると思う。例えば、今年は紙芝居をみんなに聞いてほしいということであれば、それを様々な方に協力してもらい、一斉にサマースクールの中で実施する。そこで公民館に行くとか他の展示も見られるということを具体的に広報していただくといいのではないかと。授業で行うことは難しいと思うが、サマースクールと連携して人を集める方法もある。

委員：サマースクールは何日からやっているのか。

委員：だいたい夏休みの始まり、子どもが学校へ行くリズムが崩れない頃か、または崩れてしまったものを直したい8月末である。夏休みの前後で設定されている。

委員：各図書館にはお話ボランティアがいる。少ないところでも10名、多いところではもっと大勢の方がいる。声をかければ喜んでサマースクールへお話にいくと思うので、是非そういう方も活用していただきたい。魅力的な展示物があれば広報も出来るし、生涯学習センターのアピールにもなると思うので、是非そういう形でやっていただきたいと思う。

委員：2007年、2008年に平和祈念の関係で出前ができるようなものを引っさげて小学校や高校を回ったことがある。そのときはかなり反響が大きかった。先生が集めてくれたということもあるが、学校はそういうところだと分かっていたし、また行ってみた結果がそうであった。生涯学習センターで制度化していただき、ルートを作るような方法もあると思う。学校の先生方に生涯学習センターが実施している内容をPRする一つのチャンスでもあると思う。

委員：小学校の先生は任期が短く、自分が赴任してきた地域にどのような社会資源があるのかがあまり詳しくなく、全く知らないまま終わってしまう。公民館があることを小学校の先生に知ってもらうのにはとてもいいチャンスだと思う。

委員：資料7に「講演直前（前座）に「紙芝居上演」を、直後に「すいとん試食会」を開催することにより、相乗効果をはかる。」とあるが、この紙芝居上演は資料6とは別のものか。

事務局：紙芝居は2日間行った。被爆体験談の前にも紙芝居は実施された。

委員：午後に被爆メッセージとライブとあるが、この資料はあるか。

事務局：資料15になる。

委員：資料8に「第二次世界大戦末期から終戦までの食糧事情が悪い」とあるが、実際に食糧事情が悪かったのは大戦後である。参加者の声の中では「大変だった、今はよかった」との意見が出ているが、今の食糧自給率が4割を切っている。学習の発展性を考えたときに、どう学習に繋がり、どのような行動に繋がったのかを考えるとここで思考を停止して、昔は大変だったが今は良かったと止めてしまっているのか。

事務局：参加者は60、70代以上の方が多かった。終戦のときの食糧事情をよく知っている方がすいとんを食べて懐かしむような場であった。学習の視点はなかなか難しかったのではないかと感じた。

- 委員：アメリカや中国が食糧の輸出を止めたらいつでも昔に戻れる、ということをごどこかで情報として出しておかないと学習にならないと思う。
- 委員：戦時中を体験した方にすいとんを作ってもらい、子ども達に食べさせたことがある。具をたくさん入れてしまったので、それを食べても悲惨だという気持ちにはあまりならなかった。今の子ども達はすいとんを食べても悲惨だとは思わない。

(2) 資料16 町田の縄文時代の魅力を語るについて説明。

- 委員：難しい問題だと思う。町田は縄文を中心にした遺跡がたくさんあるところだが、発掘された資料のほとんどは常設展という形で市民の目に留まっていない。とても欠陥の持った自治体だと思う。便利なところに人がびっくりするような建物を作り、中身を充実させ、そういうものが目に留まれば関心を持つ方が出てくることは間違いないと思う。社会教育施設としての博物館が出来れば、状況は大きく変わるだろうと期待している。
- 委員：板碑を作って表示すればいいと思う。町田は宅地開発や道路建設などで文化財に匹敵するようなもの、町田の市史にある様々なものが勝手に移動され、行方不明になっている。見つかったとしても宅地の中にあり、その人が離さないものが現在ある。そういうことから、あった場所に板碑を立てれば、ここにどういうものがあつたのかが分かると思う。今は何もないのでほとんど分からない現状である。現在ある町田の市史は2004年に作られたものだが、調べていくと多々問題がある。生涯学習センターからも上に向かって発信していただけたらと感じる。
- 委員：参加者の声では小中学生にも知ってもらいたいとあるが、大人向けで難しい内容だったのではないかと思う。小学6年生は必ず縄文体験をする。縄文時代から人が住んでいたということは小学生にも浸透しているが、それより一歩突っ込んだ話は知らない。この会の方には小中学生向けの話し方を開発していただき、学校に話しにきてくれたら楽しいと思った。それから、サマースクールでは「南つく探検隊」というのがある。学区域にどんな史跡があるのかを探検して回ることをして、その場所に長く住んでいる方の協力を得ないといけない。知識を持っている方々が子どもたちに話しをしてくれる機会があつたらいいと思う。学問的な考古学の問題も含めて、それをかみ砕いて子どもたちに還元する活動になればもっと広がるのではないかと思う。
- 委員：どこの学校も必ず縄文体験をする。5年生か6年生のときにひなた村で縄文体験をするので、この講師の方が町田の魅力を説明されたらまたちょっと違うと思う。
- 委員：博物館はどの駅からも遠くて立地が非常に悪いが、隣に遺跡公園があるので子どもを惹きつけやすい。谷を隔てた反対側にひなた村があり、ひなた村で縄文体験ができる。このゾーンを縄文ゾーンとして生かすことができれば様々な展開があると思う。
- 会長：町田の文化財について、小中学生にも行き届くような企画であってほしい。
- 事務局：今回はまちだ地方史研究会の方が講演しているのではなく、文化財係の川口氏が講師だった。この方は小中学校でも子ども達に分かりやすい説明をしている。文化財を広めるために、考古資料館もあまり活用されていないので、そういうことを含めて文化財係でも考えている。今回の企画とはまた別問題ではないかと思う。
- 会長：是非タイアップして事業にも積極的に加わっていただければと思う。
- 委員：総会の中で講演が始まった形であった。総会と講演会との間に時間を設けたり、一度退席をして出直したりといったけじめは必要ではないか。

(3) 資料17 介護予防月間オープニングイベントについて説明。

(意見・質問)

- 委員：事業コストが安いと思うが、なぜ評価はCなのか。
- 事務局：これはコストではなく、人員効率に問題があつた。生涯学習センター事業として実施したわけではなく、小間使いのような形となつてしまった。市の事業としてはやるべきことだと思うので、それを応援していくという立場ではやる意義はある。関わり方に改善の余地はある。共催というよりも場所を貸しているだけという感じだった。出資自体は高齢者福祉課が負担

している。

委員：今日的な課題に取り組まなければならないというのは公民館の一つの役割であると思う。自分の知らない分野があるので、その場合はしゃしゃり出ても前に進まない。小間使的な印象を相手に与えておきながら実を取る、という形でやらないとプロジェクトの幅を広げることにはできないと思う。そういう点からはいかがか。

事務局：共催という形で催すのであれば発言権を持ち、学習の面を入れられればと思うが、今回はそうならなかった。今後も関わりを持つのであれば、その辺を高齢者福祉課と話し合いたい。高齢者福祉課も主体的にやっているわけではなく、市民団体の運営委員会があってそこで決められている。

委員：新しいプロジェクトに取り組もうとすると、どれをとっても難しいということか。

事務局：場所の提供やPRの協力をして援助するという姿勢に特化することも考えられる。

委員：発言権を求めないまでも市民のニーズをじっと見ていければいいのではという意見ではないか。そこで話し合われていることは何か、なぜそれをやりたいのかを見ていることで自分たちが次に何かをするときのヒントになると思う。それはそれでいいと思うという意見だと思う。

会長：また、幅広い事業展開ができないかというご意見だった。

委員：健保組合も介護予防の活動を積極的に実施している。社会保険関係の介護予防の活動、特に医療費の高騰を防ぐために治療から予防へという活動が非常に大きく動き出してきているので、そういう意味での活動は生涯学習センターとは少し違うのではないかと思う。

委員：市の中には介護予防を専門に行う部署がある。こういう問題はそこが主導権をとって行っていればいいのであり、内容にあるコーラス、演劇、ダンス等の活動発表は生涯学習センターを拠点に活動しているサークルであったりするので、そういうのを支援するのはここではないか。活動している人たちが介護予防にも積極的に出て行き、精神的な活動を支援するのも立派な生涯学習センターの支援になっていいと思う。

事務局：人的問題としてここでやるべき事業なのか。その分人員が取られてしまう。そこまで関わりを持たなければいけないのかという部分はある。

委員：であれば、思い切って貸館だけをすればいいのではないか。

事務局：場所貸しだけの関わりにしていかないと人的面では難しいということでC評価とした。

委員：活動の発表をしているのでここでやる意味はある。

(4) 資料18 サタデーコンサート Vol.59「若い演奏家によるコンサート」について説明。

(意見・質問)

委員：このところコンサートマナーを身につけるといっているのが続いている。そろそろ返上したらどうか。サタデーコンサートの演者の選定に問題があり検討していると聞いていたが、それはどうなったのか。

事務局：来年度は内容を変更していきたいと考えている。今までクラシックだったが、11月はハーモニカデュオにし、演者・演目の工夫を今年度からやり始めている。来年度もいろいろと工夫していきたい。

会長：演者の選定はどのようにしているのか。

事務局：演者の選定は、フレッシュコンサートの場合は各大学へ依頼をして推薦書を出していただく形で集めている。その他のコンサートは、今までは1人の方にコーディネートしていただいたが、来年度はそのやり方は縮小していく。

委員：コンサートそのものはやるが、選定の条件はいろいろ詰めているということか。

事務局：いろいろな工夫をしている。ジャンルについてもクラシックだけではなく、他のジャンルも今年度から取り入れている。

副会長：大きなホールではないからできるコンサートは身近な感じがする。駅前でギターを弾いている青年がいるが、町田出身者だったらここで発表する機会があれば若者が集まると思うが、そんな奇抜なことがあってもいいと思う。

委員：以前、アイヌの女の子の歌を聞いたことがあるがとても素晴らしかった。小さい空間で輪になって歌った。みんなで手を叩きながら歌っていくのが素晴らしかった。

副会長：小規模だからできるものを企画していただけたら嬉しい。

委員：平和祈念展の実施目的の表現について、「よって」や「もって」という表現が行政的で一般には馴染みのない表現だと思う。なるべくなら避けたほうがいいと思う。

4. その他

(1) 2013年度市民大学事業について

事務局：来年度の市民大学講座について、講座の中身を企画する時期にきている。次回の教育委員会でプログラム委員の委嘱をしていただく。この委嘱された委員と一緒に市民大学のプログラムを作っていく。最終的に3月の定例教育委員会で報告をし、来年度の市民大学の講座が決定するという流れになる。この運営協議会にお願いしたいのは、プログラム委員に対して意見を出していただきたい。プログラム委員と運協委員が顔を合わせる場面がないので、この場で意見を出しそれを提出する形となる。

会長：これについては次回審議する。公民館事業と市民大学事業は合併したわけだが、市民大学事業はそのまま生きるのか。何のために合併したのか。その辺も含めて問題になるのではないか。

事務局：現在、公民館事業と市民大学事業の摺合せができていない。市民大学の講座を考えるとときにプログラム委員を決めることが前提になっている。本来ならばもっと前に来年度の市民大学講座を考えるべきだった。この時期になるとまず委員を決めなくてはいけない。それから講座を作っていくので来年度の事業を激変することは難しい。その辺を含めてご意見をいただきたいと思う。

会長：市民企画があり、センターの企画がある。センターの企画として市民大学が今までやってきたことを受け継がれても構わない。一般の企画だとあり方が問題になると思う。

事務局：市民大学の講座はある程度決まっているので、それ以外の公民館事業で行っている事業をどうしていくのか考えていきたい。特に市民大学とことぶき大学のすみ分けである。市民大学には年齢制限はないが、ことぶき大学と同じような方が受講されている。市民企画講座と市民大学講座と重複する部分があるので、市民企画講座についてはテーマを決めて募集をかけていくことを考えている。市民大学とのすみ分けをきっちりしていきたい。

会長：ことぶき大学は年齢に制限があるか。

事務局：60歳以上である。高齢者の生きがいづくり、引きこもり対策ということで趣味・教養系の講座もある。市民大学は地域の人材育成ということで、地域に還元できるような中身を作っている。

委員：組織のあり方に関する意見なのか、プログラム委員に対する意見なのか。

副会長：企画に対する意見でいいのではないか。

委員：ことぶき大学と市民大学の両方を受講していることを自慢している人たちもたくさんいる。市民大学には問題があり、大勢の人たちが回りまわって受講していたり、カテゴリーに合わせて同じ分野しか受けなかったりと新しく入りたくても入れないというのが現実にある。申込書の中に初心者優先となっているものもあるが、実際にはそうっていない。3回申し込んでも3回とも受けられなかった人もいれば、8回も受けられた人もいる。ことぶき大学、市民大学の両方を受けられないシステムができないか。片方を受けたら片方は来年にというような規制をしてもいいくらいに、ことぶき大学は人気がある。受けたい方が多くても定員が少ない。その辺も併せて考えていただけたらと思う。

事務局：来年度のことぶき大学は実技コースのように定員が30名以下のもの行わずに、ホールでできる講座をしたいと考えている。ホールの講座は1.2倍くらいの競争率になるので、応募された方のだいたいは受講できるのではないかと思う。実技のコースは定員20名のところに100名以上の応募があるので、どうしても落とされる方のほうが多くなってしまふ。そのような理由から、なるべくホールでできる座学中心の講座をやりたいと考えている。今年度の市民大学の受講について、国際学以外は定員割れしている状況なので、何年か前の状況とは違っている。その辺も含めてご意見をいただきたい。

委員：そういうことであれば、それなりに宣伝し直してもらえないか。町田の歴史にしても陶芸にしてもかなり人数が減っている。以前のように、活気の出てるような宣伝の仕方をしていただきたいと思う。

委員：定員割れを起こすようになった原因は何か。

事務局：陶芸の後期は野焼きをして土器をつくるという講座であり、自分の好きなものを作れないというのあって定員割れの一要因として考えられる。他の講座は、参加者の年齢層が上がり、リピーターの高齢化もあり、また若い人が入ってきていないことが考えられる。以前は60代、70代が中心だった。市民大学の講座の題名がここ何年間は同じであるので、そういう問題もあると思われる。先日、さがまちコンソーシアム大学プロジェクト委員会に参加してきたが、題名によって応募数に違いが出ると聞いた。中身が分かるような講座名にすると集客が得られるということで、題名も重要だと思った。国際学は毎回違うテーマで実施しているので新鮮さがあると思うが、他の講座はほぼ同じ題名になっているということも影響しているのではないかと思う。

(2)「生涯学習センター」の愛称について

事務局：昨年の事業仕分けの中で、公民館の名称が古いということで愛称をつけたらどうかという指摘をいただいていた。「まちだ中央公民館」という名称も残っているが、公には「町田市生涯学習センター」となった。愛称を募集したらどうかという意見もあるので、この運協でも何かご意見があればお願いしたい。

副会長：「生涯学習センター」になったばかりで、それが定着しないうちに新しい名称ができるというのはいかがなものか。もう少し「生涯学習センター」を認知していただいて、それがだいぶ認知されてから新たに愛称をつけたほうが良いと思う。

委員：10月にセンターまつりがあり、そのときに「生涯学習センター」という名称が長いという意見があった。愛称は必要ではないかと感じた。是非できるものならあったほうが良い。墨田区の生涯学習センターは「ゆーとりあ」という名前がついている。

委員：正式名称でないと考えれば愛称があってもいいと思う。生涯学習センターは一般名詞であり、固有名詞ではない。町田とつけて初めて固有名詞になる。一音で言える長さのものがあるほうが少なくとも若い人には受けが良いと思う。

→ (1)(2)は次回協議する。

<報告事項>

1. 事業の最終報告

報告1「親子星空教室～夏休み星空ガイド～」、報告2「小惑星探査機はやぶさ2講演会」、報告3「乳幼児を持つ保護者のための家庭教育学級」、報告4「浴衣の着付け講座」について報告。

(意見・質問)

委員：報告4の記入年月日について、これでいいのか。

事務局：企画した年月日である。

委員：そうすると報告2の記入年月日はおかしいのではないか。

事務局：記入年月日については、次回までに整理させていただく。

2. センター長報告

(1) 教育委員会について

11月2日に開催された。11年度のまちだの公民館の発刊と生涯学習センターまつりの結果について報告した。今回のまつりは企画・運営委員を公募し、参加・体験型にした。良かったとの声が多かったということを経営委員に報告した。次回は12月14日に開催予定である。市民大学のプログラム委員の委嘱、プログラム委員選任要項について報告したい。また、生涯学習ボランティアバンクの

概要、登録資格、利用者の範囲、スケジュール等を報告したい。市議会について、11月29日から開会される。一般質問は12月4日から10日まで。平和教育の取り組みについて一般質問がされており、ヒアリングのときには市の見解、特に学校での取り組みについて聞きたいとの内容だった。図書館に関することでは和光大学ポプリホール鶴川の利用状況について質問があった。それからデジタルアーカイブの取り組みについて、特に郷土資料をデジタルアーカイブとしてどのように活用していくのかという質問がされている。

(2) その他

教育プラン改定検討委員会の第1回目が11月21日に実施された。委員長に教育長、小中学校の校長先生各2名が参加し、教育委員会の管理職で委員会を進めている。改定方針について、基本プランと重点プランを改訂していくという方針を決定させていただいた。8月にプランの原案を決定し、パブリックコメントを行って2014年2月に教育プランを改定するということで決定していく。生涯学習推進計画について、教育プランと並行して検討することになっている。生涯学習センター内に検討チームを立ち上げ、3月までに原案を検討する。来年度の予算について、1月4日に内示が出る。今後の予定について、12月9日に東村山市で公民館研究大会が開催される。12月10日にボランティアバンクの個人情報審議会が行われる。12月12日に青年学級の三者懇談会が行われる。第2回教育プラン改定検討委員会が12月18日に予定されている。ここからプランの中身について検討していく。

3. 東京都公民館連絡協議会の活動について

委員：11月19日に第8回定例会議があったのでその報告をする。第2回目研修会の内容は本日お配りした資料のとおりである。第3回研修会は2月17日に開催予定である。「厳しい財政状況の中での公民館」というテーマで、シンポジウム形式で行う。コーディネーターとして首都大学教授の荒井先生、各自治体からの報告もある。町田市からも参加し、元公運審委員長であり、現在町田に公民館をふやす会の代表である倉敷町恵氏に参加いただく。他市は東村山市の公運審委員長である川村氏、国立市の元公運審の山家氏である。内容はこれから詰めていく。役員会から関東甲信越静研究大会についてどう進めていけばよいか委員部会でも検討してほしいと要請があった。今年は松本、来年は新潟、再来年は埼玉、その次は東京都で開催される。そろそろ準備をする段階にきているが、都公連の加盟団体の数の問題や東京都の協力が期待できない状況から運営が非常に難しくなっている。委員部会としては、辞退するなら早めに辞退するという意思表示をすべきではないかという回答をする方向で話し合いをしている。未だ決定ではないが、今後大きな問題として取り組んでいかなければいけない。

会長：2月17日のシンポジウムへの参加は自由か。

委員：委員、一般の方、職員と参加できる。積極的にご参加いただきたい。

4. その他

事務局：全国公民館連合会が主催している全国公民館報コンクールに生涯学習NAVIを応募した。

→ 今後の日程について

1月29日（火）午後2時～4時 文学館 第6会議室

2月24日（日）午後3時～5時 生涯学習センター 視聴覚室

3月26日（火）午後2時～4時 生涯学習センター 学習室2